

感染症は社会を直撃する

中村 安秀

大阪大学大学院 人間科学研究科 ボランティア人間科学国際協力論講座

【はじめに】 古来、ペスト、天然痘、コレラは、その大流行とともに、当時の社会のありかたや政治体制そのものを根源から覆してきた。20世紀では、スペイン風邪とHIV/AIDSが人々の生活様式や人生観を大きく変えた。そして、重症急性呼吸器症候群（Severe Acute Respiratory Syndrome : SARS）は社会に大きな影響を与えた21世紀最初の感染症であった。SARSは2003年7月までに患者数8,096名、死亡者数774名を惹起し、WHOは感染地域に対する異例の渡航延期勧告を出した。世界銀行によれば、SARSは中国のGDPの伸びを0.3%、鈍化させたという。

【SARS危機渦中の香港日本人社会】 2003年7-8月に「SARS禍中の香港在住日本人に対する心理社会的サポート調査」（横田祐子・中村安秀・金吉晴）を実施した。香港の日系企業の駐在員116名とその家族70名に対する質問紙調査の結果、駐在員の24%および家族の17%が身近にSARS感染者又は疑い例が発生したと回答した。「自分もSARSで死ぬのではないか」という思いを少しでも持った者は、駐在員の41%、家族の41%にのぼった。また、駐在員の93%、家族の94%が「新しい病気ゆえ、多くの情報があっても、何が正しいのかわからなかったこと」にストレスを感じていた。駐在員、家族ともに最も信頼していた情報源は、情報の受け手に必要な情報を取捨選択していた香港支社発の社内情報と、具体的な症状と予防法や感染者発生ビル名などを公開していた香港衛生署のホームページであった。日本のテレビや新聞は情報源としてのアクセスは多かったが、信頼したと答えた者はごく少数であり、パニックを増長するような報道姿勢に対する批判が多くみられた。【心理社会的サポートの重要性】 SARS流行時の2003年3月から5月末ごろ「日本から見捨てられた気がした」と回答した者は、駐在員の65%、家族の60%にのぼった。一方、香港の日本人社会では、家族や友人という私的なネットワークを通じた自然発生的な支えあいが生じ、日本からの見舞いや励ましも精神的な支えとなっていた。感染症が引き起こす心理的なパニック状況に対しては、専門家によるカウンセリングだけでなく、家族や周囲の人々および行政機関などからの支援が不可欠である。とくに物理的な隔離を行う際には、感染地域に住む人びとの孤立感を防ぐために、外部からは見舞いや励ましのメッセージを発信し続けると同時に、当事者同士が連帯できる環境作りなど「人びとの関係性」を再構築するような心理社会的サポートが重要であろう。

---

The outbreak of infectious diseases hit hard the civil society: a case study of Japanese expatriate employees and their spouses in Hong Kong

YASUhide NAKAMURA

Research Center for Civil Society, Graduate School of Human Sciences, Osaka University, Osaka, Japan